憲法と映画(119)『ワンオペレーション』 米

＜かな＞



仕事で家を留守がちの娘婿に代わって我娘は3人の子どもを抱えながら、育児にワンオペ状態で奮闘している。たまには保育園のママ友たちと子連れで遊びにも行っているようだが、それでも育児に一杯いっぱいになって助けが必要になると私たちジジ・ババの出番で孫守の役割が回ってくる。

映画の舞台はアメリカ。個人主義が徹底していて子どもの育児に頼れるのはお金で雇ったベビーシッターぐらい。映画の主人公リンダは、原因不明の病で胃瘻(いろう)を余儀なくされている幼い娘の世話をしながら自らはセラピストとして働いている。夫はといえば船乗り(？)でなかなか帰ってこない。そのくせ頻繁に携帯で子育てに限らず口だけは出してくる。ある日、娘と自宅アパートに戻ると天井からの水漏れと突然の崩落で部屋中水浸しになってしまう。まるでリンダの心の崩壊を予知しているかのようだ。家主に修理を依頼するがなかなか直してくれないので、娘とともに海辺の格安モーテルで暮らすことを余儀なくされる。セラピストの仕事では、顧客の患者が赤ちゃんを残して失踪してしまい対応に苦慮したり、娘の担当医からは体重が増えなければ胃瘻の管を外すことはできないと叱責されたりと息つく暇もない日々はいつ終わるとも見通しが持てない。誰にも頼れない孤独な状況が続き、ついに限界に達し思い余って娘のお腹の管を引き抜いてしまう。その上、モーテル近くの夜の海に何度も飛び込むが押し寄せる波に叩きつけられて砂浜に押し戻されてしまう。「こんなことで死んではだめだよ。助けてとSOSを発信して」という監督のメッセージが伝わってくるようだ。

娘の登場は砂浜に大の字に倒れたリンダの目の前で「お母さん」と呼びかけるシーンだけ。全編をとおして病気の娘は声だけでしか登場しないので、観客は否が応でもリンダに感情移入してしまう。実に上手い作り方だ。ちなみに映画の原題は「もし足があったらあなたを蹴飛ばしてやる」だ。家に居ない夫への腹いせとも取れる彼女の本音のようだ。

リンダ(ローズ・バーン)の化粧気のない落ちくぼんだ目、げっそりとこけた頬、無造作に束ねられた髪の毛をこれみよがしにアップで映し出す。きっとこの映画のために大幅に減量したに違いない。迫真の演技にも頭が下がった。